

ヘレンケラーが私たちに伝えていること

はじめに

私の家にヘレンケラーの伝記があり、小学校入学前に祖父に読んでもらった記憶がある。当時はその本を読んでも何も感じることができず、そんな人がいたのだなという程度にしかなかった。

重複障害の授業を受け、改めてヘレンケラーについて調べてみようと思った。

ヘレンケラーの生き方

ヘレンケラーは視覚と聴覚の重複障害者である。そんな彼女がどうやって言葉を覚え、話せるようになったのだろうか。先生の顔に手を触れて言葉をしゃべるときの舌と唇の動きを真似することによって話せるようになった。音も光もない世界では、触れたり、匂いを嗅いだりすることで情報を得ている。毎日何気なく付けている香水やリングがその人をその人だと理解する助けとなることがある。

人生を自分と同じように障害を持った人のために使うと言った彼女は、日本の障害者福祉にも大きな影響を与えた。日本の各地に養護学校などが作られるきっかけとなった。このような彼女の行動がなかったら盲ろうの障害のある人に目を向けることはなかっただろう。

たとえ視覚・聴覚に障害があっても教育をすることができ、その人の世界を広げることができるのだということを感じ取ることができるだろう。

一人の家庭教師が彼女の人生を変えたように、教育者が子供にもたらす影響は計り知れない。将来子供たちを教育していく立場になる私たちは、すべての子供たちが可能性を秘めており、教育の対象に入るということ、教育者が子供の可能性を左右する存在であるということを確認する必要がある。

最後に

世界で最も素晴らしく、最も美しいものは、目で見ること、手で触れることもできない。それらは心で感じなければならない。

これはヘレンケラーが残した言葉である。視覚・聴覚の障害があった彼女が言う言葉だからこその心に刺さるものがあるが、これは私たちのための言葉であるように感じた。私は目も見え、音も聞こえるという状況に依存しすぎているのではないか、大切なことや大切なものを十分に感じ取れていないのではないかと思いはっとした。聞こえない、見えないからと言って悲観的になるのではなく、豊かな「目」をもって世界を見る方法なんていくらでもある。実際に世界を豊かに美しく感じ取った人がいたということを感じておきたいと思った。